

# KSK 川崎市障害者社会参加 推進センター通信

編集人 川崎市障害者社会参加推進センター  
所長 関山進  
編集責任者 広報・啓発委員会  
委員長 伊藤 實  
〒210-0834 川崎区大島 1-8-6  
川崎市南部身体障害者福祉会館内  
電話 044-246-6941  
FAX 044-246-6943  
E-mail zksk@nifty.com  
<http://kawashinkyo.org>

## 令和 6 年度川崎市身体障害者福祉大会 開催



(主催者あいさつを行う関山進大会会長)

令和 6 年 7 月 7 日(日)、中原区宮内の会館とどろき 2F 大会議室にて「令和 6 年度川崎市身体障害者福祉大会」が式典と公演の二部構成で開催されました。

大会スローガン「**自立と共生の地域社会の実現に向けて**」を掲げ、川崎市内の身体障害者及び関係者約 100 名が一堂に会しました。今年度は麻生区・多摩区が当番となり準備を進めてきました。今年度は川崎市市制 100 周年と

いう記念すべき年であり、参加者の皆様の熱意がより一層感じられる大会となりました。

### 第一部 式典

大瀧純子実行委員長の開会のことばで幕を開けた式典は、関山進大会会長(川崎市身体障害者協会理事長)による主催の挨拶と続きました。「この大会は市内の身体障害者が一堂に会し、それぞれが抱える様々な課題について理解を深め、解決に向けて共に歩みを進

めていく重要な機会である」との挨拶があり、参加者の積極的な意見交換と協力を呼びかけました。

来賓挨拶では、まず福田紀彦<sup>ふくだのりひこ</sup>川崎市長より、自身のバリアフルレストランでの体験を紹介しながら「健常者を中心に世の中のルールや建物が作られている現状を改めて認識し、真のノーマライゼーションの実現に向けて取り組んでいく必要がある」と力強く語られました。また、新たに策定された地域リハビリテーション<sup>あおきのりお</sup>構想について触れ、障害者だけでなく、すべての市民が当事者意識を持って取り組むことの重要性を強調されました。

続いて、青木功雄<sup>あおきのりお</sup>川崎市議会議長からは、パラリンピック選手の活躍に見られるように、障害者の社会参加や活躍の場が広がっているとの認識が示され「誰かのために貢献できることが自立につながる」というメッセージが参加者に贈られました。

奥村尚三<sup>おくむらなおぞう</sup>社会福祉法人川崎市社会福祉協議会副会長からは、参加者の日頃の活動への感謝が述べられました。また「互いを認め合う福祉の心を育み、地域の課題を我がこととして捉え、共に解決に向けて取り組むことができる地域づくりを目指していく」という思いが語られました。



(要望事項発表の様子)

ご挨拶を頂戴した後、ご来賓の方々の紹介と続き、渡部修治<sup>わたなべしゅうじ</sup>川崎市身体障害者協会事務局長による前年度の要望事項の取扱いの経過について報告があり、続いて障害種別構成団体等の代表者による令和 7 年度に向けての要望事項の発表が行われ、各団体の代表者がそれぞれの要望の背景や重要性について熱心に説明を行いました。

令和 7 年度に向けての要望事項	
視 覚	市内の高齢者施設における視覚障害者対応の設備の整備と視覚障害者の特性を理解したサービスの提供体制の確保を要望します。
聴 覚	聴覚障害児の早期支援とろう高齢者の居場所づくりを要望します。
脳 性	駅構内のトイレに障害者の排泄介助が可能なベッドやリフトの設置を引き続き要望します。
脊 損	「自動車燃料券」交付制度の実施を要望します。
オストミー	ストーマ装具給付は、2 区分ではなく、3 区分での支給を要望します。
難 聴	人工内耳や補聴器の電池購入の助成を要望します。
腎 臓	重度障害者医療費助成制度の維持を要望します。
川身協	合理的配慮の提供の義務化に伴う民間事業者への周知と支援を要望します。

## 第二部 公演

続いて第二部では、地元で活動する団体「おと絵がたり」による公演が行われました。代表の加藤妙子<sup>かとうたえこ</sup>氏らによる 3 つの演目は、音と絵と語りを組み合わせた表現方法で会場を魅了しました。

1 つ目の「たまがわのふくろうの話」では、自然との共生をテーマに、人間とフクロウの

関係性を通じて相互理解の大切さが描かれました。2つ目の「たぬきの火の用心」は、中原区に伝わる昔話を基に、地域の絆や思いやりの心を伝えるものでした。3つ目の「亀の石水盤」は、川崎区の伝説を題材に、協力することの大切さが印象的に表現されていました。これらの公演は、障害の有無に関わらず楽しめる内容で、参加者からは「地域の文化を通じて、多様性の理解が深まった」との声が聞かれました。



(おと絵がたりによる公演の様子)

公演の後、中込義昌なかごめよしまさ副実行委員長による閉会のことばで大会は幕を閉じました。

今回の福祉大会は、障害者の生活課題や支援の必要性を直接訴える場としてだけでなく、文化を通じて共生社会の理念を体感できる機会となりました。

### 福祉大会参加者感想

大会実行委員会では、大会終了後にアンケートを回収いたしましたので、その中から一部を抜粋してご紹介いたします。

- ・市長が障害者に寄り添うご意見で良かったです。
- ・要望事項発表の場で、すべての招待者に残って聞いていただきたいと思います。
- ・おと絵がたりでは、川崎の昔話が良かった。川崎の民話を初めてききました。 等

本大会の成果を踏まえ、今後も継続的に関係各所との対話を進め、要望事項の実現に向けて取り組んでいく方針です。また、より多くの市民に障害者福祉への理解を深めてもらうための啓発活動にも力を入れていきたいと考えています。

川崎市の障害者福祉のさらなる向上に向け、本大会を一つの重要な節目として、今後も関係者一同、努力を重ねてまいります。

(大会事務局)

### 身体障害者福祉大会を終えて

令和 6 年 7 月 7 日、連日続く猛暑の中、用意した椅子を増やさなければならないほど大勢の方にお集まりいただき、主催者の一員として、先ず皆様に感謝申し上げます。

第一部の式典のメインである川崎市に対しての各構成団体から出された要望事項は、高齢化にあたって、災害時に対してなど、いずれも切実なものばかりでした。どの障害者も自らの努力だけでは解決できない事案を川崎市が聞き入れて実行していただけることを切に願うばかりです。

さて、第二部のアトラクションでは、聴覚障害者と視覚障害者がともに楽しめる題材を探すのが主催者として大変悩ましく思いましたが、この点を踏まえて、おと絵がたりを企画してみました。どのくらいの方に満足していただけるかとても不安でしたが、アンケートの結果では「よかった」「まあよかった」などで、「よくなかった」と思った方がいなかったことにほっとしております。中には、川崎の民話でよかったと書き添えていただいたこと、企画した私として、おと絵がたり側との出演交渉など多少の苦労が報われた思いです。

最後に、ご来場者の皆さまと福祉大会の運営に携わっていただいた方々に改めて感謝、御礼を申し上げます。

(大会実行委員長 おおすき すみこ 大瀧 純子)

## 令和 6 年川崎市心身障害児者福祉大会

令和 6 年 6 月 22 日(土)13 時より川崎市総合自治会館にて「**障害のある人もない人も共に生きる川崎の街に**」をスローガンに、川崎市心身障害児者福祉大会が開催されました。

第 1 部式典は、川崎市肢体不自由児者父母の会連合会石橋会長の開会のことばに始まり、大会実行委員長・一般社団法人川崎市自閉症協会小泉会長の挨拶に続き、三田村川崎市副市長・岩隈川崎市議会副議長・久々津川崎市社会福祉協議会会長代理（事務局長）による来賓者ご祝辞をいただき、来賓者紹介の後、一般社団法人川崎市自閉症協会池畑理事より大会宣言が読み上げられ採択され、川崎市育成会手をむすぶ親の会美和会長の閉会のことばで終了しました。

第 2 部では、内多勝康氏（元 NHK アナウンサー、社会福祉法人あおぞら共生会所属）より『ソーシャルアクション～インクルーシブな社会のために～』とのテーマでご講演いただきました。

NHK アナウンサーの傍ら障害者福祉の取材を進められ、医療的ケアが必要な方のご家族の困難な現実を目の当たりにし、自らも社会福祉士の資格を取得。NHK を早期退職し第二の人生「自分のためじゃなく人のために」と国立成育医療研究センターに新設された、医療的ケアが必要な子どもと家族のための短期入所施設「もみじの家」のハウスマネージャーとして 8 年間勤務。「医療的ケアの必要な子を持つ家族の多くが、自らの病気の受診、睡眠を取るなど当たり前の事が出来ず、家族の孤立が日常化していると痛感した」と話され、「『誰もが暮らしやすい社会の実現』のために、ソーシャルアクションとして障害のある人に必要なサービスや制度について世論や行政に働きかけを行い、障害のある人の“生活の質”を高める事が大切である」と語られました。更に自ら医療的ケアの必要な人の家族会を結

### 「令和 6 年大会宣言」

本大会のスローガンである“障害のある人もない人も共に生きる川崎の街に”を実現するため、ここに集う方々と共により一層行動することを誓い、次の事項を決議します。

#### 1. 地域の中で、安心・安全に暮らせるまちづくりを目指します。

令和 3 年度から施行されている第 5 次ノーマライゼーションプランが改定されました。なお一層一人ひとりのライフステージに合わせた、多様なニーズに応じられるサービスの整備と相談支援体制の更なる充実を望みます。

また、障害特性を理解し、状況に応じて柔軟に対応できるような人材の確保と育成の促進を強く望みます。

#### 2. 地域の一員として安心して暮らし続けられることがあたりまえの社会になるよう、一層の啓発を進めます。

「障害のある人もない人も、お互いを尊重しながら共に支え合う自立と共生の地域社会の実現に向けて」この理念を実現するためには、障害理解のために一層の啓発を進めていかなければなりません。「障害者差別解消法」「合理的配慮」など障害があっても安心して社会生活を送れるまち、人権が尊重され共に幸せに暮らせるまちづくりに取り組みます。

令和 6 年 6 月 22 日

令和 6 年川崎市心身障害児者福祉大会実行委員会

成し「家族会という束になって行く事で、地域の声を行政等に届けてインクルーシブな社会の実現を目指している」とも話されました。こうした具体的な取組みを粘り強く推進する重要性を改めて感じました。

（社会福祉法人ともかわさき事務局分室

高橋 賢二）

## パリ 2024 パラリンピック競技大会 川崎市ゆかりの選手たちの活躍

川崎市ゆかりの選手たちが、パリ 2024 パラリンピック競技大会で素晴らしい成績を収めました。彼らの努力と挑戦は、私たちに勇気と感動を与えてくれました。

以下、各選手の輝かしい成績をご紹介します。

(敬称略)

競技	選手名	種目	結果	川崎市との関係性
陸上競技	とざわ ともみ 兔澤 朋美	女子 100m（義足・機能障害 T63） 女子走幅跳（義足・機能障害 T63）	予選 9 位 5 位	市内在勤
	つじ さえ 辻 沙絵	女子 100m（上肢障害 T47） 女子 400m（上肢障害 T47） 混合 4×100m ユニバーサルリレー	予選 13 位 7 位 4 位	市内在住
	しんぼ やまと 新保 大和	男子円盤投げ（脳性まひ F37）	4 位	市内在住
射撃	せが あきこ 瀬賀 亜希子	混合エアライフル伏射（運動機能障害 SH2）	17 位	市内在住
水泳	かわぶら たいよう 川渕 大耀	男子 200m 個人メドレー（運動機能障害 SM9） 男子 400m 自由形（運動機能障害 S9） 混合 4×100m メドレーリレー	予選 14 位 7 位 予選 9 位	活動拠点が川崎市のクラブ（宮前ドルフィン）に所属
	ひなた かえで 日向 楓	男子 100m 自由形（運動機能障害 S5） 男子 50m 背泳ぎ（運動機能障害 S5） 男子 50m バタフライ（運動機能障害 S5） 男子 50m 自由形（運動機能障害 S5） 混合 4×50m メドレーリレー	予選 10 位 7 位 8 位 予選 10 位 7 位	活動拠点が川崎市のクラブ（宮前ドルフィン）に所属
	せりざわ みきか 芹澤 美希香	女子 100m 背泳ぎ（知的障害 S14） 女子 100m 平泳ぎ（知的障害 SB14）	予選 15 位 6 位	活動拠点が川崎市のクラブ（宮前ドルフィン）に所属
	むらかみ しゅんや 村上 舜也	男子 100m バタフライ（知的障害 S14） 混合 4×100m フリーリレー	12 位 5 位	活動拠点が川崎市
	車いす ラグビー	はが まさゆき 羽賀 理之	混合	金メダル

各種目のアルファベットは競技の種類、数字は各競技におけるクラスを表しています。

選手の皆さん、お疲れさまでした！その挑戦は、私たちにたくさんの笑顔と元気をくれました。これからも皆さんの素晴らしい挑戦を応援し続けます！

## 40 年の軌跡：車いすから見た社会の変化と変わらぬ課題

私たちの周りには、車いすで生活する人々があります。今回の特集では、頸髄損傷による四肢麻痺の障害を持つ北島総美さんの 40 年間の軌跡取材し、彼女が直面してきた課題、社会の変化、そして彼女がどのようにして自立した生活を送っているかをご紹介します。北島さんの言葉を通じて、障害との向き合い方、日々の工夫、そして社会に望むことについて、深く掘り下げていきます。

### ◆一瞬にして人生が変わった、あの日

北島さんは 18 歳の時、交通事故で人生が一変しました。

「当時はシートベルトの規制がなかったので装着していませんでした。私は助手席に乗っていて、運転手が前方の危険な運転をしている車を避けようとして事故に遭い、頭を強く打ちました。気がついた時は病院の暗い廊下にストレッチャーで寝かされていました。家族が駆け付けて来て、ひとこと『手足が動かないんだよ』と言ったことは覚えていますがそのあとも意識は朦朧としていました」

### ◆過酷な治療とリハビリの日々

事故後の治療は、想像を絶するものでした。

「頭蓋牽引のため、頭蓋骨にドリルで穴を開けられました。18 歳の私には、髪を剃られることにもショックを受けました。約 1 ヶ月間、頭に重りをつけたまま仰向けで寝かされる日々を過ごしました」

1 年半のリハビリを経て、北島さんは厳しい現実と直面します。

「先生から『自分の足で歩くことも立つこともできないから車いすが必要です』と宣告されました。ですが、周りの患者さんを見ていて、私も車いすのままで家に帰ることになるんだなということはどういう感じでした」

### ◆車いすとの出会い - 新たな人生の始まり

自分専用の車いすが完成した瞬間、北島さんは深い感情に襲われました。

「自分用の車いすが完成して納品された時、すごくショックでした。これがないと私は生きていけない、ということがはっきり分かってしまったのです」

### ◆40 年を経た今 - 北島さんの身体の状況

事故から 40 年が経過した今、北島さんの身体状況は以下のようになっています。

「頸髄損傷による四肢麻痺の状態です。腕は動きますが、指が全く動かず、足は全く立ち上がりも歩くこともできません。肩から下は感覚がありません。針で足を刺されても分からない麻痺の状態です」

しかし、長年の経験から、北島さんは身体の微妙な変化を感じ取れるようになりました。

「どこかが痛い・熱いような時には違和感を感じたり、冷や汗が出たりして、体が別の方法で教えてくれるということが分かってきました」

### ◆適切な支援で可能になる日常生活

北島さんは、適切な支援の重要性について語りました。

「四肢麻痺になり車いす生活になってしまっただけで生活がとてもしづらい体の状況にいますが、適切な機器や支援があれば皆さんと変わらない日常を送ることができます」

家のバリアフリー化や福祉機器の導入が生活改善に大きく寄与したと北島さんは説明します。

「電動ベッドや天井走行リフトの使用は日常生活に大きな変化をもたらしました。天井走行リフトは、車いすからベッドへの移動や入浴の際に非常に役立ちます。これにより、ヘルパーさん一人でも安全に介助ができ、湯船

に入ることさえ可能になりました」

#### ◆日常生活でのサポート

北島さんの日常生活には、様々なサポートが欠かせません。

「便意や尿意も分からないし、自分でコントロールすることもできません。排便は訪問看護に来てもらって補助してもらいます。排尿は膀胱瘻設置術をしていて、蓄尿袋に流し、溜まったら捨てます」

#### ◆食事の工夫と外食の現実

北島さんは手が不自由であっても、自分で食事を楽しむ工夫をされています。

「食事はなんでも食べられますが、握る動作ができないので、リハビリの作業療法士にフォークに自助具を取り付けてもらいました。それを手にはめて、手元に食事を用意してもらえば一人で食べられます」

しかし、外食時には多くの課題に直面します。

「車いすなので、一定の高さのテーブルがないと食べられない。外食に行ってもテーブルが低かったり真ん中に脚があるテーブルばかりで、なかなか車いすのまま入れるお店がないんです」



（自助具の付いたフォークと専用テーブルで食事をする北島さん）

北島さんは外食時の困難に対して、自ら解決策を見出しています。

「そういうときは自分用に作ってもらった折

りたたみのテーブルを持ち歩くようにしています」

しかし、このような工夫が必要な現状は、バリアフリー化が十分に進んでいないことを示しています。

「バリアフリーが整いつつあるけど、なかなかそういうところまでいき届いていないのが、現状なんですね。ファミリーレストランとかも、四つ脚のテーブルになっているところが本当に少なく、ある程度席数がある店舗でも、一つ置いてあれば良い方で、でもそこに障害の無い方が案内されていて、結局座れないんです」

#### ◆社会に望むこと

北島さんは、より包括的な社会づくりへの希望を語ります。

「電動車いすも持っているんですけど、電動車いすでもっと高さがあるんです。もっと入れないんですよ。もちろんテーブルの高さを車いす使用者の一人一人に合わせるの難しいことだと思いますけど、膝が当たらない荷物置きがない物や、ある程度の高さや幅の基準はつくってもらわないとなあ、と思います。行政の会議でも荷物置きに膝が当たって入れないテーブルで不便を感じます。テーブルに限らず、スロープも車いす向けに特別に設置する必要はなく、いずれは誰もが高齢者になる事を前提にバリアフリー化して欲しいと思います」

今回は、北島さんが立ち上げた NPO 法人ウィンドウの活動や、障害者の社会参加について詳しくお伝えします。北島さんの経験を通じて、私たち一人一人にできることを考えていきましょう。

（次号に続きます）

（取材：坂本（編集委員）・安藤

編集・執筆：安藤）

### UDトークで広がるコミュニケーションの可能性

令和 6 年 9 月 10 日（火）、川崎市聴覚障害者情報文化センターにて、音声を自動で文字に変換し複数言語に翻訳できるアプリ「UDトーク」の体験会が開催されました。この体験会は、音声認識技術を活用したコミュニケーション支援アプリの可能性を探る貴重な機会となりました。

今回の体験会では、参加者が実際にアプリを使用し、その効果と現状を体験しました。

体験会は 4 つのグループに分かれて行われ、各テーブルにろう者、難聴者と要約筆記者が配置されました。参加された多くの方が新しい技術への関心が高く、熱心に取り組む姿が印象的でした。

自己紹介の場面では「はじめまして、〇〇と言います」という発言が文字化されると、参加者から驚きの声が上がりました。出身地の紹介など会話が進むにつれ、アプリの画面には次々と文字が表示されていきます。時折発生する誤変換に、参加者たちは笑い合いながらも、コミュニケーションの新たな可能性を体験している様子でした。

体験会後半では、講演を想定した演習も行われました。要約筆記者がリアルタイムで誤変換を修正する様子を観察し、テクノロジーと人間の協働の重要性が話題となりました。

講師の先生は「UDトークは可能性を秘めています。人間の介在なしには完璧な情報保障は現状では難しい」と述べました。また、聴覚障害のある人が発言する際の情報保障にも注目すべきだとの意見も出されました。

体験会を通じて、UDトークの現状と今後の課題が浮き彫りになりました。高齢者向けの操作サポートや、騒がしい環境での音声認識の精度向上など、課題は多くあります。一方で、聴覚障害者の社会参加を促進する可能性も感じられました。

この体験会で最も印象的だったのは、テク

ノロジーの進歩と要約筆記者の役割の相互関係です。UDトークのような音声認識技術は新たな可能性を示す一方で、現状では人との協働が不可欠です。要約筆記者は誤変換の修正や話者の意図を正確に伝える重要な役割を担っています。



（体験会の様子）

今回の体験から得られた気づきは、技術と人を効果的に組み合わせることの重要性です。この協働により、聴覚障害者と健聴者間のコミュニケーション障壁を徐々に取り除いていける可能性を感じました。

今後もこの体験会等を通じ、より多くの人に関わってもらうことで、支援のあり方や技術が向上し、共生社会の実現に向けた着実な一歩を踏み出せるのではないのでしょうか。

（事務局 <sup>あんどう</sup> 安藤）

#### 編 集 後 記

能登半島地震の被災地は、地震の甚大な被害を受けた上に 9 月記録的な豪雨により、崖崩れや仮設住宅の床上浸水などの複合災害に見舞われた。地球温暖化による気候変動に対応するため、政府は水害対策を改めて見直すとともに、「防災庁」構想を早急に検討したらどうか。（広報・啓発委員長 <sup>いとう みのぶ</sup> 伊藤 實）

発行人 神奈川県障害者定期刊行物協会  
〒222-0035 横浜市港北区鳥山町 1752 番地  
障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール 3F  
横浜市車椅子の会内 （頒価 100 円）